

# 北海道打診 (八)

瀧川 勸 則

## (十二)

第二期拓殖計畫前半實施に於ける道路事業の實績は右諸表の如くであるが、更に計畫全體の實績を概観して見たいと思ふ、即ち第二期拓殖計畫實施初年度たる昭和二年度に於ては支出豫定總額金二千五百十五萬二千九百圓であつて之に對し同額の豫算成立し實績に於ても若干の繰越額及不用額を生じたりとは謂へ略佳良なる成績を收め得たのであつた、然るに昭和三年度及昭和四年度に於ては經濟界不況の打撃を受け豫定財源に不足を生じ一般財源より金千四百四十萬圓を補填し當初計畫の遂行に努めたのであるが、昭和三年度に於ては支出豫定額金二千七百七十一萬七千九百

七十五圓なるに對し金二千六百五十五萬八千二百九圓、昭和四年度に於ては金二千八百六十八萬九千六百三十四圓なるに對し金二千六百八十八萬四百八十六圓の實施豫算額を得たるに過ぎなかつた、昭和五年度に至つては財界の不況愈深刻となり爲に一般財源の補填も困難となり止むなく繼續費其の他に對し節減又は繰延を行ひたる結果漸く金二千七百三萬九千九百二十一圓の豫算を計上したのであつたが同年の帝國議會は不幸解散となつたので、實行豫算に於て右と同一金額を支出することに決定を見た、然るに深刻なる經濟界の不況は國庫歳入を減少せしめ、物價を大いに低落せしめた、政府は右の實行豫算すら到底維持し得ずとなし金百八十八萬四百七十三圓の節減及繰延を行ふに至つ

たのである、右により當初計畫に於ける支出豫定額金三十三萬四千八百四十四圓なりしに對し實施豫算は金二千五百十五萬九千四百四十八圓となつたのである、昭和六年度に至つても財界の不況は依然深刻を極め支出豫定額金三千八百八十五萬七千五百九十二圓なるに對し財源は金二千四百四萬千八百九十二圓に減じ爲に豫算も此の範圍を出する能はざる状態となつた、然るに政府は年度中途に於て金百六十九萬五千七百七十圓の節減又は繰延を實行するに至り結局實施豫算は金二千二百三十四萬六千七百二十二圓に過ぎざるに至つたのである、昭和七年度に至つては財源に未曾有の打撃を受け一方政府が極端なる財政緊縮方針を採ると共に行政整理を斷行することゝなつたため拓殖費も亦計畫實施以來の最低額となつた、即ち金二千四百四十萬八千四百十四圓を計上し得たるに過ぎない、然るに同年の議會は解散せられ實行豫算は金二千三百三十萬八千八百九十八圓と決定した、所が第六十二回臨時帝國議會に於て金九萬九千二百二十五圓の追加豫算成立するあり又年度半に於て時局匡救事

業實施の必要に迫られ拓殖費豫算に對し、農山漁村振興事業費金五百六萬三千八百三十一圓の追加豫算計上せらるゝあり第六十三回帝國議會の協賛を経て之を實行したのである、當初支出豫定額は金三千三百九十一萬八千四百二十四圓の所前記實行豫算に前後二回の追加豫算を加ふるときは實施豫算は金二千六百四十七萬九千九百四十五圓となるのである、然るに累年の不況に加へ昭和六、七兩年度に於ける大凶作竝に昭和七年九月に於ける大水害等の損害に依り一般農山漁村の疲弊困憊其の極に達し之が爲拓殖費財源も愈大打撃を蒙り昭和八年度に於ては僅に金九百七十六萬九千九百九十九圓を見込得るに過ぎなかつた、政府は拓殖事業の進程及該事業の重要性に鑑み、之を此儘放置すること能はず一般財源よりの補填を決意し金二千三百三十八萬千四百十八圓及追加豫算に於て農山漁村振興に關する經費金五百五十二萬三千七百十九萬合計金二千八百九十萬四千八百六十八圓を計上し第六十四回帝國議會の協賛を経たのである、而して昭和八年度拓殖費財源は、昭和六年度以降の社

會事情、相次で起れる災害等に依る歳入の減少並電信電話擴張事業及災害復舊其の他凶作水害等に關する諸支出に依る歳出の激増せる結果僅に三百五十二萬百八十九圓を算するに過ぎない事態となつた、然しながら北海道の實情は之が爲直ちに事業の大縮少を許さざるのみならず、災害凶作に對する道民の更生施設の如き極めて喫緊事に屬し今にして救済施設宜しきを得るに非ざれば悔を百年の後に胎すの憂なしとしない、茲に於て政府も更に一般財減より相當補填さざるを得ず一般拓殖費豫算に於て前年度と同額の金二千四百四十萬八千百十四圓を計上し、更に農山漁村振興事業費として金三百七十二萬圓を支出することゝし兩者を合せ金二千五百十二萬八千百十四圓を以つて拓殖事業の進展を中斷せしめざると共に道民に更生の方途を授くることに努めたのであつた、然しながら當初の支出豫定額たる金三千九百三十一萬四千三百十三圓に比較し未だ充分なりと言ひ得ざるのみならず一應表面を糊塗し、辛うじて拓殖事業の内容を繋ぎ得たるの程度に過ぎない、然しながら斯く努力

經營の效果は昭和十年度に至り漸く曙光を認め得るに至り、經濟界亦稍好轉せる爲拓殖費財源は俄に金二千五百十五萬二千九圓を見込得るに至つたのである、然るに政府は國際聯盟脫退、ワシントン條約の廢棄、滿洲事變の突發等に依り帝國を周還する世界狀勢の變遷——所謂非常時の出現と昭和九年各地に襲來せる災害對策等に巨費を要するので一般の經費に對し可成的緊縮方針を採らざるを得ない爲に昭和十年度の拓殖費豫算は當初の支出豫定額金四千二百五十八萬三千九百十五圓なるに拘らず前記財源見込額以下の金二千三百四十九萬圓を計上することゝし殘額は出來得る限り非常時豫算に貢獻せしむることゝしたのである。

右に依れば第二期北海道拓殖計畫實施第一年度即ち昭和二年度より昭和十年度迄の實施豫算額の總計は金二億三千九萬二千六百九十一圓となる、同年度間の支出豫定計畫額は金二億九千五百七十八萬四千三百二十八圓なるに比し金六千五百六十九萬一千六百三十七圓の實施不足額を生じたことゝなるのである。

依是觀之に本計畫前半の實績は豫定計畫と甚だしく扞格を來し成績良好なりと言ひ難いのである、又計畫の内容に付て之を觀るも一般經濟事情竝拓殖狀勢に著しき變化を來したる今日世運の流態に添はざるもの尠しとしない。而して自然的非人爲的打撃に對しては俄に之を棄脱し得ないまでも敢然之と戰ふべき常備を必要とする、又人爲的事項に關しては慎重なる研究と多年の經驗とに依り之を矯正し萬全を期さねばならぬ、第二期北海道拓殖計畫は前半實施の經驗と新なる研究とにより之が根本的改訂の必要を感じしむるに至つたのである、茲に於て政府は第六十七回帝國議會の協贊を経て北海道拓殖調查會を設置し計畫改訂に就き

慎重なる調査の上第二期拓殖計畫改訂案を得目下政府に於て審理中である、其の審程難航中にあること及改訂の根本方針は本稿の當初に於て一言した通りである、而して第二期拓殖計畫改訂案は昭和十一年度から昭和二十七年年度までの十七箇年間に金七億三千三百二十八萬六千三百三十七圓を支出せむとするものである（A表参照）、此の額は第二期拓

殖計畫に於ける支出豫定總額たる金九億六千三百三十七萬八千八百二十八圓から右に述べた既支出總額金二億三千九萬二千六百九十一圓を控除したる殘額に相當するのである、然るに計畫改訂に依り金二億五千三百十萬圓程度の事業利益を見込み得るとのことであるから、第二期拓殖計畫に於ける約十億圓の事業分量を豫定し得ることとなる、右總額の内道路路費は金一億六千八百九十一萬六千五百四十八圓、橋梁費は金千三百五十六萬七千圓合せて金一億七千五百五十九萬九千八百四十六圓となつて居る。

第二期拓殖計畫前半の實施に於ては財源確實ならざりし爲豫算に於て豫定計畫額を成立せしめ得たのは其の第一年度のみといふ慘めさであつた、改訂案に於ては此の缺點を補強するが爲一般財源よりの補填を強調し計畫年度を延長し以つて豫定計畫の遂行を確保せむことに努めたのである、同時に事業の内容に於ても各費目間の振合を慎重研究し一廉の事業を實施せるに拘らず之が効果顯著ならず或は不急不用の事業を先にし不經濟の結果を生ずるが如き轍を

踏まざらんことを期したのである、立案者の苦心推して知るべく事業實施後の效果亦期待し得るものがある。

道路橋梁費の年度割を見ると昭和十一年度の金四百七十一萬六千三百九圓を最低に昭和二十六年年度の金一千四百五十一萬七千五百九十三圓を最高とし總額の約二割四分に相當するのである、第二期拓殖計畫に於ては道路橋梁費は總額の約一割八分なりし點より考ふるときは莫大なる増額と言はねばならぬ、道路費の内譯に於ては第二期拓殖計畫と同様、新設、改良、修繕、調査、補助、驛遞及渡船の各目を定めたことは變りはないが各目間の配分に意を用ひ改善の見るべきものありと言ひ得る(B表参照)

右の如く從來の實績と事業の緩急及他事業との振合を考慮し拓殖上緊要と認むる事業の擴張を圖ると共に時代の進運に伴ふ新規事業を設定し以つて拓殖事業の合理的遂行に努め頓て第二期拓殖計畫に於て豫定したる總生産額十八億圓を實現せむとする見込である、此の第二期拓殖計畫改訂案が承認せられ確實に實施せらるゝときこそ始めて北海道

に眞の黎明が訪るゝ時なりと信ずる。

(十三)

北海道拓殖事業に於ける施設の主なるものは、移民招徠と土地の給與、農耕地開發の助成、交通機關の施設と助成港灣事業、河川事業、國有林の整理並經營、泥炭地及濕地並酸性土壤の改良、水田の造成、産業に關する施設の九部門であるが是等の施設により現在の北海道が如何なる程度に發達せるや其の現況の概略を説明し合せて我々が比較時現況を詳知せる内地の一部と比較して見たいと思ふ。

昭和十年一月一日現在の戸數は五十四萬五千三百九十戸人口は三百六萬八千二百八十三人、一戸平均五、六三人である、昭和元年即ち第二期拓殖計畫實施直前に於ては戸數四十五萬八千四百十八戸、人口二百四十三萬七千百十人、一戸平均五、三二人に過ぎなかつたものが戸數に於て八萬六千八百七十二戸、人口に於て六十三萬千八百八十三人、一戸當に於て〇、三一人の増加を示してゐるのである、而し

て現在人口の密度は一方里當り五百三十三人を數ふるのみであるから東北六縣の平均一方里當り千六百十人に比較するに其の三割七分に過ぎない、更に全國最低密度の岩手縣の一方里當り平均千五十九人に比較すれば五割八分に過ぎないのであるから、未だ開拓殖民の餘地あることを充分に證明するものである、今東北六縣の平均密度により北海道の可容人口を算出して見ると八百十九萬三千六百十人（千島を除く）となるから東北程度の密度とする爲にも尙五百十二萬五千三百二十七人を増加收容せねばならない、故に拓殖計畫に於て企圖した人口六百三萬人（一方里當千八十三人）の收容の如き實に易々たるものである、只問題は如何にせば二十箇年間に此の理想に到達し得るかである、計畫の基礎的計算に依れば從來の人口増殖率は千分の二十であるから昭和元年末の人口を基本とすれば向ふ二十箇年間に百六十三萬人の自然増加があり百九十七萬人の移住あるものと推定し得るのである、而して此の移住人口は農業者七十二萬六千人、其の他百二十四萬四千人に依り構成せら

るのである、北海道の農耕地地は百五十八萬町歩、専用放牧地は六十萬町歩合せて農牧適地は二百十八萬町歩あり、一戸の農家は約五町歩を以つて活計を立て得るから農家四十三萬六千戸を收容し得る譯である、而して農家一戸平均は五、六人であるから農業人口の理想數は二百四十一萬人と算出し得ることとなる、更に農業人口と其の他の人口との比は四對六であるから農業人口二百四十一萬人に對する其の他の人口は三百六十二萬人に達する譯となり従つて全人口は六百三萬人となるのである、故に六百三萬人は北海道に於ける農耕適地百五十八萬町歩が一亘り開墾し盡されたときの理想人口を意味するものであつて、北海道人口收容力の最大限度を示したものでないことは明瞭である、北海道に於ける全面積に對する農牧適地の割合は二割強に當るのである、内地に於ては一割八分に過ぎないが尙一方里當り三千二百人を收容してゐるのであるから、北海道の六百三萬人は實に悠々たる收容力なることは想像に餘りあるであらう、又北海道に於ける石炭其の他礦物の埋

藏量、千古不斧の原始林、世界三大漁場の一として無盡に包藏せらるゝ水産的價値及最近着眼論議せられつゝある千島列島の開發等を想像し且農耕施設の完備及進歩、種苗の改良等農耕の基礎的條件成就し集納的經營普及し各種産業高度化するに至らば必ず一大樂土を現出するものと言ひ得べくその曉に於ては一方里當り尠くとも二千人の人口を收容し得べく、千島を除く本島のみにして一千餘萬人を容るゝは些して困難ではない。

尙防耐寒の設備と訓練とが完成し本島北岸及千島列島を根據とし海上に更に一段の飛躍を爲し得るとすれば北海道の前途寔に洋々たるものありと信するのである、而して北海道拓殖の過程は第二期拓殖事業前半の實績を合せ農耕地九十四萬一千九百五十八町歩を墾成し尙六十三萬八千四百二町歩の未成農耕適地を殘し、毎年一萬町歩乃至三萬町歩を墾成しつゝあるのである、牧畜適地、山林其の他未開の土地も夫々其の適性に從ひ開發利用せられつゝあり全道總生産額は金五億四千四百七十一萬六千圓に達し明治四十二

年即ち河島長官立案の十五箇年に亘る第一期拓殖計畫實施直前に於ける金六千七百七十一萬二千十三圓、昭和元年即ち第二期拓殖計畫實施直前に於ける金四億八千六百六十四萬九百九十四圓に比し、諸物價低落の今日相當なる増加と言つて差支あるまい、尙一戸當平均は金千五十圓、一人當平均は金百八十八圓の割合である、依是觀之當初の目標たる總生産額十八億圓と相去ること未だ遠しと雖も拓殖の行程は今や其の半に達せるものと言ひ得るのである、殊に第二期拓殖計畫は其の支出豫定を著しく未廣式に編成して居るので年度數に於て半を経過するも其の經費に於ては總額の二割四分程度を支出したに過ぎないのであるから十八億圓と五億圓とを比較して直ちに悲觀する必要はないのである。

(十四)

北海道の動脈たる道路其の他の交通施設に付き一言したと思ふ、道路の總延長は一萬六百九十四里であるが、更

に之を種類毎に區分すれば、國道百五十一里十二町、地方費道七百二十二里、準地方費道八百三十三里二町、市道二百四十四里二十七町、町村道八千七百四十三里十七町となり更に町村道は拓殖費支辨のもの九百三十六里三町、町村費支辨のもの七千八百七里となるのである、以上の道路中開拓使以來國費を以つて開鑿せるものは四千四百三十四里であつて、其の他は地方費、町村費又は民間有志の私費を以つて開鑿されたもの及踏分道路である。

次に道路の普及状況を見るに一方里當り二里一町に過ぎない、中にも根室支廳管内の一方里當り二十四町を最も粗なりとするが、將來拓殖進展と共に一方里當り三里と見るも最低限度二萬里に達せしむる必要があるのである。

北海道の道路密度と内地の道路密度とを比較するに内地の國府縣道の密度と北海道の全道路の密度と略同一程度である、國道、地方費道及準地方費道のみにて見ると東京、愛知、兵庫、福岡各府縣の約十分の一弱の普及率である、又道路全體に付て見ると千葉、三重、島根各縣の十分

の一位に相當してゐる、更に人に對する割合を見ると國府縣道に於て東京府の一人當り〇、三米に對し北海道は二、三米であつて新潟、三重、熊本等の各縣と匹敵するのである、人口に對する道路全體の割合は東京府の一人當り三、〇米に對し北海道は一四、〇米であつて千葉、石州、廣島山口等の各縣に匹敵するのである。

而して道路の延長と其の機能の如何は直ちに産業の消長に關係し大體に於て道路の延長を以つて其の地方の生産状態を卜知し得るものである、私が一部府縣に付て調査した所によると國府縣道一里當りの生産額は約五萬六千七百圓程度の平均を有するものであると思はれる。北海道の國道地方費道、準地方費道の延長からその生産額を割出して見ると約金九億六千萬圓に達せねばならぬのである、然るに北海道の生産額の實際は金五億四千四百七十萬圓であるから五割六分六厘の實效を擧げつゝあるに止り年々約四億圓の不足である、如斯きは幹線道路が状態不良であつて交通上の使命を充分果し得ざるものなること及之等上級道路を



補助すべき下級道路の發達未だ充分ならず且道路と一體をなして機能を發揮すべき鐵道、軌道、自動車、港灣等の普及に付ても未だ考慮の餘地あることを立證するものである。

北海道に於て第二期拓殖計畫當初に於て目標とした總生産額金十八億圓に到達するが爲には現在の上級道路一千七百里を以つてしては企及し得ず、約五千六百里の良道と之を補助すべき市町村道とを配置し且人口の増殖及高速度交通機關の普及を必要とするのである、只此に考慮すべきは北海道の主要産物たる海産物の相當部分は陸路を必要とせずして、需要地に運送し得る點である、以つて前述の要件を幾分緩和し得るであらう。

北海道に於ける鐵道は國有鐵道三千二百八十一杆、地方鐵道五百十杆合計三千七百九十一杆に達し特に地方鐵道に對しては鐵道省補助の外更に拓殖費の補助を交付し其の發達を助長してゐる、又軌道は其の延長百八十九杆にして北海道拓殖の爲効果ありと認めらるゝものに對しては地方鐵道同様拓殖費を以つて開業より一定の年限を限り補助を交

付し其の發達を促進せしめつゝあるのである。

更に北海道の交通機關として特質あり且重要なる地位を占むるものは殖民軌道と稱するものである、殖民軌道は自動車其の他の交通機關の未だ發達せざる地方に拓殖費を以つて敷設し一般交通の用に供する設備である、上等の線にあつてはガソリン車を運轉する國營の軌道であるが、或線にあつては拓殖費を以つて線路を敷設し車輛を設備するに止り沿線の住民は借用車輛又は自己所有の車輛を人力を以つて手押する無料軌道である、沿線住民が生産物を満載して市場に送りその歸路筈の帆を張つて家路に歸る風景は臺灣と北海道とのみにて見得る悠長な人生漫畫である、如斯き簡易なる軌道も他の交通機關なき地方に於ては實に偉大なる效用があり數萬人の生活を保證しつゝあるのである、現在此の目的を以つて敷設された軌道は全道を通じ二十六線延長四百五十八杆の長きに及んでゐる。

次に特殊なる地位を占むるものは森林鐵道である、森林鐵道は國有林經營上官行斫伐製品輸送の爲森林地帯内及森

林地帯と附近樞要地又は他の交通機關と連絡する爲敷設したものであつて特に木材搬出の爲には缺くべからざる設備であると言つて差支ない、現在此の目的を以つて敷設した鐵道は八線、軌道は二線其の合計延長は三百三十八軒である。

北海道現在の主要港は函館、小樽、室蘭、釧路、留萌、網走、稚内及根室の八港であつて各港の特性は、函館の海産物、小樽の木材、室蘭及留萌の石炭、釧路の雜穀、根室の水産等を數ふるを得べく尙網走は北邊唯一の避難港として有名であり稚内は樺太との連絡上重要な役割を演じつゝ、ある、更に漁港は岩内、江差、浦河、杵形、絞別、余市廣尾及天賣の八港及小漁港二十五港は拓殖進展と共に順次完備しつゝある。

又北海道の河川は拓殖の進展に伴ふ森林の伐採と共に自然洪水氾濫の原因を多からしめ近時被害の及ぶ所舟筏の通行を不便ならしむるのみならず、墾成耕地を流失し時に人命を奪ふが如きことなしとしない、故に是等の慘害を防禦

し水を治め、水を用ひ返つて産業上に裨益するところありしめねばならぬ、先年北海道に河川法の施行せらるゝと共に本道の河川行政に劃期的進歩を齎した、河川事業に於ては第一期計畫として主要河川二十六川の調査を開始し、石狩川第一區外七大河川の治水事業に着手し更に第二期事業として石狩川第二區外七大河川の治水計畫を豫定し得たことは他の拓殖施設と合せ大手搦手から北海道の産業を助長せむとする合理的計畫たることを信じて疑はない。

### (十五)

北海道の拓殖事業も今や退陣を許さざる所迄進展した、最早一向專念目的に向つて堂々進軍するの一途あるのみである。

北門の鑛鑰、北方警備に端を發した北海道の拓殖は我國過剩人口の活路として又國富の増進富源の開發上經濟的社會的重要性を帯ぶるに至つた、然るに我國人口の増殖率が餘りに高き爲北海道の人口活路としての價值に多くの期待

を掛くる能はずとなす者なきに非ざるも、北海道の可容人口は既に述べた如く優に一千餘萬人と稱し得べく之に千島列島を加ふるに於ては恐らくは一千五百萬人と稱するも必ずしも夢想に非らずと信する、我國人口増加の趨勢は主として東京、大阪、福岡、愛知、兵庫、京都、神奈川及北海道の一道七府縣に集中し増加數の約六割餘を占めてゐるのであるから他の各縣に於けるものは僅に残りの四割が分布するに過ぎないのである、北陸、山陰及四國地方に於ては既に人口増加を停止したるが如き觀あり、且前記の如き大都市に集中する人口は北海道を除き主として商工業人口と認められるから最早内地農業人口は飽和状態に達し商工業人口も近く同一點に達するのではあるまいか、然らば年々百萬を以つて算する増加人口を如何に消化し得るや、或は臺灣、南洋、朝鮮、滿洲を云々する者あるべきも北海道は之等諸地方に比し人口消化の捷路である。

明治維新の大變革に際し路頭に惑へる數十萬の失業士族は既に北海道に救濟されたのである、日清日露兩戰役の前

後未だ商工業の發達微々たる時代に於ては内地三四千萬の人口も尙過剩であり、貧窮職を求めて得ざる細民が多かつた、近くは關東大震災の際家を燒かれ父兄を失ひたるよるべなき罹災民の多數は北海道に渡つた、當時北海道は之等細民に對する天恵の授産場だつたのである、最近の經濟的大變動に依り簇出せる失業者も多數北海道に渡つた、北海道連絡の要衝たる青森縣の如きは一時渡道する之等失業者の足滞りとなりその整理に苦しめられたのであつたが、何時とはなしに之等も北海道に吸収せられ事なきを得たのであつた、北海道は將來に於て發生すべき如斯き諸問題に對しても何等か寄與すべく又、寄與せしめざるべからざる捷路に當るのである、斯く考へ來るとき北海道の拓殖は益々重要性を帯び來る譯である。

前述の如く移民の原因は主として不利不幸なる状態より離脱せんが爲に起るものであつてその大部分は徒手空拳資本に乏しき恵まれざる階級より出るのである、然るに移民は相當の資金を必要とし又相當の困難に打勝たねばなら

ぬ、依つて之を適當なる方法を以つて援助し之に適當なる指導を與へねばならぬ、企業移民の如く比較的資本に恵まれたる移民は別とし、現在の北海道の如く自作農扶殖を目的とする場合に於ては充分なる保護の施設を必要とするや論を俟たない、北海道移民保護制度は之等移民に對し一定條件の下に土地と資本とを與へ以つて開墾に従事せしめむとするものである、而して移民の不幸離脱の苦痛或は努力は一方に於て幸福追求の慾望の具現と言ひ得べきを以つて、新移住地に於て自己の運命を開拓し生活を繁榮ならしむる希望と積極的原因の存することも亦重大なる要件である、されば移住地の氣候風土等の自然的條件は勿論、經濟的、社會的條件が現住地に比し有利ならざる限り進んで移住する者なかるべく、又假令事實は有利なりとするも有利ならざるものと誤解するか或は事情明瞭ならざる間は多く移住を敢行するの勇者なかるべし、然るに北海道の實情は内地各府縣人士の詳知する所とならず、甚だしきは北海道と言へば直ちに熊を思ひ或はアイヌを連想する。

諸人の恐るゝ寒氣の如きも烈寒は一冬二、三回に止り決して長く續くことはない、又北海道にスキーが輸入せられて以來從來冬を恐れた北海道の人士は一變して冬を歡迎し雪を謳歌する様になつた、スキーの爽快味は實に北海道人士の士氣を鼓舞しやがて北海道拓殖に曙光を齎すものではあるまいか、私は零下二十六度の雪中に於てすゝめらるゝまゝに生れて初めてスキーを試みた當初の二、三回はスキーの長さ程も走れない、然しながら十分間の練習によつて三十米、一時間にして百五十米、一時間半にして直滑降ならば四、五百米は易々と滑れる、寒さはすつかり忘れ今日は随分暖かい日だねえなどと言つて笑はれた位である。

北海道の實情は未だ内地の人士には充分知られて居ない、文化の程度甚だ低き野蠻地域だと思つてゐる者が多い、依つて北海道の實情を詳に宣傳して誤解を解き、移民保護制度を紹介すると共に、拓殖の基礎たるべき種々の土本的施設の進捗狀況等を報告し以つて正しき北海道を内地人の眼前に露出するを必要とする、英國の商品が世界市場

から驅逐さるゝの傾向を生じたのは英國人の保守的思想と土族的商法とに災されたのである、如何に立派な商品でもおれの商品は世界一だ欲しいものは有り難く心得て金を持つてこいこの商法ではやがて顧客を失ふにきまつてゐる、北海道の真相を知らしむる努力もこれと同様、只列べて置いただけでは買ふものは尠いだらう。

又既に北海道に定住した人々でも所謂北海道氣質の建設に努力してゐる者が甚だ尠いように見受ける、各地を巡つて見ると鳥取、香川團體、岡山農場などゝその出身地の名稱を冠し且此に立籠つて出身地の慣習を固守してゐるようである、勿論祖先發祥の地を尊ぶのは極めて結構なことであり我國人の一大美德であるが、北海道移民の先驅をなす程の豪傑は一步進んで豪快なる北海道氣質の建設に努力してこそ眞に移民の氏神となり鎮守の森に永久に神鎮まる資格があるのである、各野各溪に年々人込む移民が各々自己出身地の風俗慣習を墨守し改善することを知らずんば、それは國家百年の大計の下に北海道拓殖に従事するものなりと

の燃ゆるが如き大精神の建設を妨ぐるものなりと言はねばならぬ、又移民を指導し援助すべき地位にある者は物質的拓殖を遂ぐるのみならず、實に拓殖精神建設に力を盡すべきである。之が爲めには青年學校、農民道場、漁民道場の如き施設を完備し此處に於て技術と精神とを二つながら兼ね備へた有爲の士を養成し以つて廣く全道各地に配屬すべきである。北海道拓殖實習所は此の目的の一部を實施したものである。北海道拓殖部長外山福男氏が拓殖實習生卒業式に際し「拓殖實習生を送る」なる挨拶中に拓殖精神建設の趣旨を述べられてゐるのは我等に心強き感銘を與へずにはをかない。

斯くて不義を廢し高潔なる人格を養ひ、正を踏んで動せず、營々として勤めて止まざる精神を物質的拓殖と共に確く培はねばならぬ、今や開道六十年北海道生れは全人口の六割を占むるに至つたのであるから物質的拓殖に先立ち烈々たる焰の如き北海道精神が赫焉として燃え上つてもよい頃である。(完)

# 北海道拓殖計畫改訂年度割總覽表 (A 表)

年度	總額	殖民費	森林費	產業費	土地改良費	道路費	橋梁費	河川費	治水費	港灣費	殖民費	鐵道及軌道助成費	調査費
昭和十一年	3,500,000	2,267,776	3,100,111	3,781,143	2,592,933	3,796,666	0	3,598,619	3,598,619	3,333,714	2,931,900	1,263,594	2,200,000
昭和十一年	1,500,000	2,281,256	4,076,907	4,740,771	2,833,333	4,666,666	1,000,000	7,396,956	3,600,000	3,039,976	4,500,000	1,636,000	2,798,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	4,253,018	5,151,333	2,833,333	4,000,000	1,000,000	6,593,872	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,866,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	4,779,316	5,491,999	3,233,333	4,000,000	1,000,000	7,074,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,795,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	5,225,333	5,633,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	7,554,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,691,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	5,671,333	5,974,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	8,034,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,587,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	6,117,333	6,315,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	8,514,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,483,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	6,563,333	6,656,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	9,000,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,379,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	7,009,333	6,997,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	9,480,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,275,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	7,455,333	7,434,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	9,960,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,171,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	7,901,333	7,870,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	10,440,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,067,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	8,347,333	8,306,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	10,920,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	963,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	8,793,333	8,742,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	11,400,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	859,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	9,239,333	9,178,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	11,880,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	755,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	9,685,333	9,614,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	12,360,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	651,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	10,131,333	10,050,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	12,840,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	547,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	10,577,333	10,489,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	13,320,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	443,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	11,023,333	10,928,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	13,800,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	339,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	11,469,333	11,367,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	14,280,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	235,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	11,915,333	11,806,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	14,760,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	131,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	12,361,333	12,245,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	15,240,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	27,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	12,807,333	12,684,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	15,720,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	23,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	13,253,333	13,123,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	16,200,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	19,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	13,699,333	13,562,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	16,680,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	15,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	14,145,333	14,001,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	17,160,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	11,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	14,591,333	14,440,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	17,640,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	7,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	15,037,333	14,879,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	18,120,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	3,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	15,483,333	15,318,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	18,600,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	2,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	15,929,333	15,757,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	19,080,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	1,000	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	16,375,333	16,196,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	19,560,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	16,821,333	16,635,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	20,040,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	17,267,333	17,074,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	20,520,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	17,713,333	17,513,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	21,000,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	18,159,333	17,952,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	21,480,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	18,605,333	18,391,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	21,960,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	19,051,333	18,830,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	22,440,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	19,497,333	19,269,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	22,920,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	19,943,333	19,708,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	23,400,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	20,389,333	20,147,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	23,880,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	20,835,333	20,586,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	24,360,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	21,281,333	21,025,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	24,840,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	21,727,333	21,464,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	25,320,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	22,173,333	21,903,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	25,800,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	22,619,333	22,342,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	26,280,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	23,065,333	22,781,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	26,760,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	23,511,333	23,220,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	27,240,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	23,957,333	23,659,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	27,720,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	24,403,333	24,098,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	28,200,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	24,849,333	24,537,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	28,680,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	25,295,333	24,976,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	29,160,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	25,741,333	25,415,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	29,640,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	26,187,333	25,854,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	30,120,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	26,633,333	26,293,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	30,600,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	27,079,333	26,732,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	31,080,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	27,525,333	27,171,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	31,560,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	27,971,333	27,610,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	32,040,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	28,417,333	28,049,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	32,520,000	4,000,000	3,777,000	4,500,000	0	2,788,000
昭和十一年	3,000,000	2,287,776	28,863,333	28,488,000	3,233,333	4,000,000	1,000,000	33,000,000	4,000,000	3			

道路費事業別年度割表 (B 表)

年度	總額	新設費	改良費	修繕費	道路調査費	道路改良補助費	驛遞費	淺船費
昭和一〇	三、七九八、八五八 <sup>円</sup>	一、五〇〇、八二 <sup>円</sup>	三、三、一〇三 <sup>円</sup>	一、八八〇、七五一 <sup>円</sup>	三、八〇〇 <sup>円</sup>	二八、五三 <sup>円</sup>	七、一八 <sup>円</sup>	二、九七 <sup>円</sup>
一一	四、五二六、三〇元	一、五三三、五九元	九、三〇、四七 <sup>円</sup>	一、八八〇、七五一 <sup>円</sup>	三、八〇〇 <sup>円</sup>	六、七〇、四三 <sup>円</sup>	六、一三 <sup>円</sup>	二、八九七 <sup>円</sup>
一二	四、七〇〇、七七元	一、五九七、五九元	九、〇〇〇、〇〇〇	一、九三三、八三〇	三、八〇〇 <sup>円</sup>	三、九、一八五	六、〇、九三 <sup>円</sup>	一、八、一〇〇
一三	五、〇〇〇、〇〇〇	一、九二一、九九九	一、七六八、一七〇	一、九三三、四四五	三、八〇〇 <sup>円</sup>	二、五、七五六	五、五、五三	一、七、一三
一四	六、五三三、八三三	二、一四一、六三二	二、〇七七、五九六	一、九七三、六五四	三、八〇〇 <sup>円</sup>	二、五、六五六	五、一、四四	一、六、一五
一五	八、二二〇、五三三	二、五五九、六三〇	三、一五七、三九九	二、〇八八、六九二	三、八〇〇 <sup>円</sup>	三、〇、九四三	五、一、七三	一、五、一七
一六	九、三〇〇、二二四	二、八五三、〇三六	三、三〇一、八三四	二、九二一、六六元	三、七、〇〇 <sup>円</sup>	三、六、〇五三	五、一、六六	一、四、五〇〇
一七	九、三三〇、三三七	二、八四四、〇〇〇	三、五三二、九五九	二、九四一、三七八	三、七、〇〇 <sup>円</sup>	三、七、七〇三	四、三、九三	一、三、六三
一八	九、八五五、七一九	二、八四四、〇〇〇	三、九五五、九二六	二、三三三、三七一	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	三、七、七〇三	四、一、七三	一、三、七五
一九	一〇、二八三、四四〇	二、八四四、〇〇〇	四、一七四、七五	二、四六六、五九五	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	三、七、七〇三	四、一、三三	一、二、八七
二〇	一一、九七〇、三三三	二、八四四、〇〇〇	五、四七四、九九三	二、三三三、四七〇	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	一、〇、七、七〇三	四、一、八三	一、一、〇〇〇
二一	三三、〇七三、六五五	二、八四四、〇〇〇	五、三三三、七七八	二、〇〇〇、六三三	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	一、四、九三	三、九、九三	一、〇、一三
二二	三三、〇四四、九九五	二、八四四、〇〇〇	五、三三三、九九五	二、七六七、四九九	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	一、四、九三	三、五、五七	九、一、五三
二三	三三、一四四、一九二	二、八四四、〇〇〇	六、三三三、五五〇	二、八〇〇、六三〇	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	一、四、九三	三、四、〇七	八、八、二
二四	三三、二二一、三九一	二、八四四、〇〇〇	六、三三三、四九九	二、九六八、四三二	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	一、四、九三	三、三、四七	八、五、九
二五	三三、二七三、三三六	二、八四四、〇〇〇	六、四三三、四四八	二、九七九、八五九	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	一、四、九三	三、三、三七	八、五、九
二六	三三、五五七、九九三	二、八四四、〇〇〇	六、二二八、一八七	二、九八八、三三三	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	一、四、九三	三、三、一八七	八、五、九
二七	三三、一〇四、九九六	二、七三三、〇九九	三、七三三、三三七	三、〇三三、八五五	三、六、〇〇 <sup>円</sup>	一、四、九三	三、三、八四四	八、五、九
計	一、六八八、九六六、四八六	四、七三三、七三三	六、七三三、七六六	四、二二八、六六六	四、三三三、三三三	一、三三三、三三三	七、三三三、六六六	三、三三三、三三三